

物語は想像力や創造する力を育みます

ゲスト
角野 栄子 さん
かどの えいこ
(児童文学作家)

今年、90歳を迎えた児童文学作家の角野栄子さん。ロングセラーの『魔女の宅急便』は、刊行40周年を迎えます。ブラジルでの生活を経て35歳で作家デビューした角野さんは、好奇心にあふれ、物語が大好きな子ども時代を過ごされました。本好きになった経緯や言葉についての発見、子どもの想像力についてお話しくださいました。

好きな本を探す楽しさを体験してほしい

池上 本日は、角野さんが館長を務める「魔法の文学館」にお邪魔しました。最近あまり本が読まれていないと言われますが、ここでは子どもたちがいろいろな場所に座り込んで、夢中になって本を読んでいる様子が見られますね。

角野 この文学館は、自分で本を読めるようになってお子さんにフォーカスしています。そのタイムニングで面白い物語と出会わないと、本を好きになってもえない。その時期に夢中になって本を読んだ経験があれば、その子が大人になったとき、本の文化も引き継がれていくと思っています。

池上 角野さんが世界中から選んだ物語、1万冊が

ここにあるとうかがいました。本のラインアップはもちろんですが、並べ方や内装もとても配慮されています。図書館のような整然としたものではなく、子どもたちがいろいろな発見を楽しめるように工夫されていました。このような文学館を作りたいという思いは以前からお持ちだったのですか。

角野 江戸川区から私の文学館を作りたいと声をかけていただきました。「本を好きになってほしい」その思いから立ち上げから参加し、本を選び、企画等に携わってきました。子どもたちがここに来て帰るまでに、1冊読めるくらいの幼年童話を中心にそろえて、並べ方にもこだわりました。図書館は分類して並べられていますが、それだと面白くない。どこに何があるかわからない中から、自分の好きな本

を探す面白さを体験してほしいかったです。だからごちゃまぜに置きたかったの。

池上 内装の色は、角野さんのテーマカラーでもある「いちご色」ですね。

角野 66歳で鎌倉に家を建てたときに、家のコンセプトカラーをひとつ決めるといいというアドバイスがあつて、じゃあ私は「いちご色」がいいなって。魔法の文学館では、その「いちご色」をコンセプトカラーにすることと、『魔女の宅急便』の舞台「コリコの町」のようにしたいとお願いしました。娘が内装デザインを担当しています。

池上 娘さん、くぼしまりおさんはアートディレクターでもあり、角野さんのお洋服のコーディネートなどもなされていますね。

角野 ええ。今日も、りおのコーディネートです。カラフルな服を着ると楽しく過ごせますね。

この建物は建築家の隈研吾さんの設計なのですが、池上彰さんが館長を務める角川武蔵野ミュージアムも限さんが設計されたのですよね。写真で拝見しましたが、天井が高く壁一面に本がぎっしり並んで、建築作品としても素晴らしい。ぜひ一度うかがってみたいと思っています。



物語の面白さは父が教えてくれた

池上 2024年11月から、埼玉県所沢市にある角川武蔵野ミュージアムの館長になりました。そこもまた、図書館なのか美術館なのか、それとも博物館なのか、分類が通用しないごちゃまぜのミュージアムです。ごちゃまぜは、ワクワクしますよね。

池上 ところで、今年の1月1日に90歳になられたということで、おめでとうございます。

角野 ありがとうございます。あつという間に90歳、あつという間の90年でした。

池上 角野さんが本を好きになったのは、小さいころのお父さまの影響があるようですね。

角野 父は深川（東京）で質屋を営んでいた江戸っ子の商人でしたが、とても本が好きだったんです。子ども向けのお話ではなく、自分が好きな吉川英治の『宮本武蔵』や、ビクトル・ユゴー『ああ無情』の主人公、ジャン・バルジャンの話などをよく聞かせてくれました。父は落語や講談も聞いていましたから、『桃太郎』も口伝えの物語を独特のリズムで話してくれました。物語の面白さを知ったのは父がきっかけだと思います。

池上 子どもが本を好きになるには、親が本を好きかどうか大きいかもしれません。

角野 そうですね。読み聞かせなどしなくても、子どもに背を向けて黙って本を読んでいる姿でもいい。**池上** 私の父はそういう人でした。本棚には本がいっぱい並んでいて、父は黙々と本を読んでいる。一体何を读んでいるんだろうと興味を持ちました。

角野 そうでしょう。あんなに熱心に読んでいるのだから、きっと面白いことが書いてあるはずだって、



ジャーナリスト
いけがみ あきら
池上 彰 (聞き手)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。名城大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、『週刊こどもニュース』のお父さん役を務め、子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。『池上彰の君と考える戦争のない未来』(理論社)、『池上彰の社会科教室』(帝国書院)など、著書多数。本誌の対談を集録した『池上彰が聞いてみた「育てる人」からもらった6つのヒント』(帝国書院)も好評発売中。この春は、スリランカ取材。「親日の仏教国の穏やかさにはほっとしました」

子どもは思いますよね。私の場合、戦争の影響も大きかった。6歳のときに太平洋戦争が始まって、本が大変貴重なものになったんです。友達の家に行くと少しだけ本があったので、ルビを頼りに声を出して読んだのをよく覚えています。

池上 そもそも、昔は本というのは声に出して読むものだと言われていましたね。

角野 私は、言葉って音によって形になっていくと思っています。自分で物語を書くときも、3回ぐらいいは声に出して読んで直していく。声に出すとまた違う世界が見えてくるんです。

池上 私も初めて本を書いたときは、全編通して音読してみました。引くかかるところ、読みづらいところは文章が不自然なのがわかります。

角野 教育では言葉の意味が重要視されますが、意味というのは言葉の働きの半分くらい。あと半分は声に出したときの息づかいで成り立っているんじゃないかしら。私はそこをとても大事にしています。

池上 昔は、国語の授業で習った古典、例えば『源氏物語』『奥の細道』『枕草子』などは、冒頭部分を暗誦しましたね。「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明かりて」など、いまだにスラスラと出てきます。角野さんの物語もリズムミカルで、子どもたちが音読するとても楽しそうです。

角野 長新太さんが絵を描いてくださった『サラダでげんき』という絵本があるんです。そのお話が小学校1年生の国語の教科書に載っているのです。子どもたちは声に出して読んでくれているようですね。りっちゃんという女の子が病氣のお母さんにサラダを作るお話です。「りっちゃんサラダ」として学校給食になることもあると聞いています。

池上 角野さんの娘さん、りおさんが面白いサラダを作ったことがヒントになったとか。

角野 よくご存じですね。りおが幼稚園のときにサ

ラダを作ってくれたんです。チョコレート、煮干し、マシユマロが入っているサラダ。面白いでしょ？

池上 子どもの発想というのは本当に面白い。そこから物語が生まれることも多いですね。

角野 そうなんです。『魔女の宅急便』も娘の絵から生まれました。りおは昔から絵を描くのが好きで、彼女が12歳のころ、魔女の絵を描いた紙が置いてあったんです。ほうきにまたがる魔女の後ろには黒猫が乗っていて、ラジオもぶら下がっていた。このかわいい魔女の冒険物語を書いたら面白そうだなって思ったの。ほうきで飛んで誰かに荷物を届けたらどうかしら。どんなことが起こるかなって、どんな想像がふくらんでいきました。

池上 今年は刊行40周年。映画化や舞台化だけでなく、英語、イタリア語、中国語、スウェーデン語に翻訳され、全世界で出版されています。幅広い世代に愛されている作品ですね。

ブラジルへの移住と言葉のリズムの発見

池上 角野さんの作家としてのデビュー作『ルイジニニョ少年 ブラジルをたずねて』には、ブラジルでの2年間の生活やさまざまな交流が書かれています。ブラジルにはなぜ移住されたのですか。

角野 移住したのは1959年です。ブラジルは戦争中、アメリカに物資を提供していた国ですから、しばらく国交は閉ざされていて、50年代に再開されました。当時はブラジルを中心に、南米に移民船が出ていました。2カ月かけて海を渡って行くんです。日本の若者は戦争中かなり締め付けられていたから、戦後、はじけるように自由を求めていた。私は23歳で結婚して、24歳のときに「世界を見てみた



児童文学作家
かど えい こ
角野 栄子

1935年、東京都生まれ。大学卒業後、紀伊国屋書店勤務を経て24歳からブラジルに2年間滞在。その体験を元に書いた『ルイジニョ少年 ブラジルをたずねて』（ポプラ社）で1970年に作家デビュー。代表作『魔女の宅急便』（福音館書店）はアニメーション・実写映画・舞台化された。「アッチ・コッチ・ソッチの小さなおばけ」シリーズなどロングセラーシリーズ多数。2018年、児童文学の「小さなノーベル賞」と言われる国際アンデルセン賞作家賞を受賞。23年、東京・江戸川区に魔法の文学館（江戸川区角野栄子児童文学館）が開館。

「い」と思って夫婦でブラジル行きを決めました。私たちだけでなく、若者みんなが外国に目を向けていた。小田実さんの体験記『何でも見てやろう』（1961年）が大ヒットしたのもそのころです。

池上 1952年のサンフランシスコ平和条約により、ブラジルとの国交が復活しましたね。戦後、人口急増の対策として、日本政府も大規模な移民政策を展開していました。1950年代から1970年代にかけて約5万3千人の日本人移住者がブラジルに渡ったと記録が残っています。移住されたのはちょうどそのころなのですね。とはいえ、ブラジルでは苦勞されたのではないですか。

角野 自費移民として移住したのですが、円が封鎖されていて1カ月くらいの生活費しかドルに替えられませんでした。つまり、すぐに現地で生活費を稼がなければならぬ。私は英語が多少できたのでなんとかなるだろうと思っていただけ、ブラジルでは

英語が通じなかった。夫はデザイナーでしたから話せなくてもすぐに仕事が見つかりました。でも、私はなかなか仕事が見つからず、大変でした。

池上 ポルトガル語ですものね。それにしてもご夫婦でその状態での移住とは、勇気がありますよね。

角野 勇気があるというより、無謀ですよね。

池上 今、無謀という言葉をあえて使わないようにしたんです（笑）。

角野 仕事探しも無謀でしたよ。貿易商の会社を知人に紹介されて、「面接では謙遜しないで何でもできるって答えなさい」と言われていたので、何を聞かれても「できます」って答えていたら、タイピストとして就職できたんですよ。でもね、タイピングは多少できたから、うそをついたわけではないんだけど、求められる仕事量はこなせなくて、分厚いカーボン紙を全部ダメにしてしまったこともありました。怒られてすぐにクビになってしまったの。

池上 ラジオの営業のお仕事もされていたとか。

角野 ふふふ。ポルトガル語ができないのに、フリーランスでラジオのスポンサー探しをやっていた。飛び込みでブラジルにあるアメリカ資本の会社の受付に行って、「英語ができる人いませんか？」って言うんです。そうしたら、トップの偉い人が出てきてくれたこともあります。それがブラジルのいいところ。営業成績は良かったんですよ。

池上 ブラジルでは、言葉で苦勞されたのですね。

角野 でもね、とっても楽しかった。どこでも生きていける自信につながりました。それに、先ほどお話しした「言葉はリズムや息づかいがとても大切」ということは、ブラジルで改めて気づかされたの。ポルトガル語がわからなくても、表情や言葉のリズム、息づかいでなんとなく言いたいことがわかる。だからこそ、文字で書くときにもリズムは必要だな、声に出したときの息づかいも大事にしたいって考えるようになったのだと思います。

それにしても、池上さんは、とても張りのある力強いお声ですね。言葉がしつかり響いてきます。



『魔女の宅急便』角野栄子 作／林 明子 画
福音館書店 1,650円（税込）
2025年1月25日で発刊40周年を迎えた。

この世界にあるものは想像力の塊 誰かの願いのようなものだと思う

池上 ありがとうございます。腹式呼吸をずいぶん頑張って訓練したんです。私はもともと記者でしたから、若いころは話す訓練をしていなかったのですが、急にキャスターをやることになりました。腹式呼吸だと、声帯に負担をかけずに体全体を共鳴させて大きな声が出るようになるんです。

角野 あら、私が考える言葉と同じ。言葉を伝えるには、体全体を使ってフルボディーで伝えるといいと思っています。私も腹式呼吸やってみようかしら。

好奇心が発見や想像力につながっていく

池上 角野さんは今なお、とても好奇心がありますね。今こうしてお話をしている間だけでも、私が館長を務めるミュージアムに行ってみたい、腹式呼吸をしてみたいなど、何でも興味を持って、実際に見てみたい、やってみたいというお気持ち伝わってきます。確か、ブラジルから日本に戻るときも、ヨーロッパを旅して帰ってこられたのですよね。

角野 1961年にリオデジャネイロからポルトガルのリスボンに船で渡り、スペインを横切ってフランス、ドイツ、北欧まで行きました。オンボロの小さなルノーを買って、安宿に泊まりながらの3カ月、9000キロの旅です。その後、カナダとアメリカも旅してようやく帰国しました。44歳のときには13歳の娘を連れてブラジルを再び訪れましたし、『わたしのもう一つの国 ブラジル、娘とふたり旅』(2020年・ポプラ社)、51歳でイギリスに3カ月滞在、57歳のときは魔女の取材旅行でドイツ、ベルギー、ルーマニアを巡りました。今だって、行ったことのないところには行ってみたい。

池上 その好奇心はどこからくるのでしょうか。

角野 どうしてだかわかりませんが、好奇心は小さ



ブラジル滞在中の角野さん(写真左)。サンパウロ「ルア・アウグスタ通り」にて。

いころからずっと変わらず強いんです。おもちゃもテレビも何もない時代でしたから、好奇心と想像力がおもちゃだったわけです。なんでも知りたい。見たい。やってみたい。好奇心があると発見がある、発見があると想像力が生まれます。想像力があると、何か作りたくなるんです。

落ちている木にこれを刺したら船になるんじゃないかとか、こんなものがあつたらいいなと想像していろいろなるものを何かに見立てたり、自分で作ったりして遊んだものです。今この世界にあるものは、みんな想像力の塊だと私は思っているんです。想像力というか、誰かの願いのようなもの。

池上 誰かの願い、ですか。

角野 例えば、私が子どものころは、まきでご飯を



「知りたがり」を育てる教育に

角野 私は今でも好奇心が強くて、なんでも知りたい「知りたがり」ですけど、池上さんだってあちこちに取材に行かれるでしょう。きつとかなりの「知

炊いていました。私も火の番をしていましたけど、まきを燃やしていると必ず煙が目にしみる。まきを燃やさなくてもご飯が炊けるといいなあと思っていたら、ガスコンロになって、電気釜になって、今は予約して好きな時間にご飯が炊けるようになった。これはきつと、誰かが想像したことやみんなの願いを、誰かが形にしたわけです。はるか昔には手ですくって水を飲んでいただけ、子どもにもつとたくさん水を飲ませてあげたいと思った誰かの願いが、今のコップにつながっているのかもしれない。

そんなふうに、今の世界を支えているのは想像力です。教育でも、そういう想像力につながる子どもの好奇心を大事にしてほしいと思っています。

りたがりやさん」なのね。

池上 そうなんです。「知りたがり」で「教えたがり」です。なんでもすぐに、「これはですね」と教えたくなってしまう。ときどき、「そんな説明は求めていない」と怒られることもあるくらいです。

最近では記憶力がずいぶん落ちてきましたが、教えるためには自分がしっかりと知っておかなければなりません。アウトプットを意識したインプットをすると、いろいろなことを吸収できるんです。この本の内容を誰かに伝えたいと思うと、本の読み方が違ってきます。

角野 とても勉強になりますね。

池上 ああ、また「教えたがり」が出て説明してしまいました(笑)。

角野 私ね、文部科学省のある会議で、学校の先生に何か提言はありますかと尋ねられたことがあるんです。そのとき、「学校の先生になる人には、児童文学を100冊読んでほしい」とお願いしました。100冊というのは大げさですが、まず先生に物語の面白さを知ってほしい。児童文学を読んでいる先生は、子どもたちにその面白さを伝えられると思います。それに、先生が本を読んでいる姿を見せることも大事だと思っています。

私自身が、物語を話して聞かせてくれた父をきっかけに本が好きになったように、池上さんがお父さまの姿を見て本を読みたくなったように、子どもたちもそんな先生に出会ったら、きつと本を読んでみたくなると思います。

面白い物語との出会いは、子どもたちに想像力を与えます。本のページには魔法がかかっている。子どもたちをドキドキさせたり、ワクワクさせたりする

ることができる。すると好奇心が動き出して、何かをやってみたくなるでしょう。知識を与えるばかりの教育ではなく、自分で想像して、何かやってみたくなるような、「知りたがり」を育てる教育に変えていってほしいと願っています。

池上 子どものころ、本を読むことは本当に楽しかった。本を読みながら自分の中で自由にイメージを膨らませることができました。

角野 本を読んで生まれる「想像力／イメージション」は、「創造／クリエーション」にもつながっています。物語は、空想の世界だけでなく、この世界を「作っている・創っている」のだという見方を持って、子どもたちを見守っていただければうれしいですね。

◆ 対談を振り返って ◆

好奇心の塊のような角野さん。元気の秘訣は好奇心と冒険心なのですね。私も角川武蔵野ミュージアムの館長になって、図書の展示方法や利用者が使いやすい並べ方とはどんなものかを、意識するようになりました。今回の取材では、魔法の文学館にうかがい、とても驚きました。角野さんの個性が爆発したような文学館に魅入られました。私が子どものころに、こんな図書館や文学館があればよかったのにと心底思います。ここで読書の楽しみを知った子どもたちが、やがて大人となって子どもを連れて来館する。そんな好循環が生まれそうです。

